

1 夏の夕暮れ 岡嶋保之

蝸のなく晩夏の風情がコンパクトに捉えられた作品です。特に第2連はいいと思いました。ところで「香りが聞こえてくる」という表現にはその意図が見えてきませんが、どうなのでしょう。第3連が大きな意味を持つ展開です。「今は亡き母」は一般的で凡庸ではないかと思いました。別の言葉でいろいろ試してみるといいと思います、新しい展開が見られるので参考になると思います。第2連の「鎮魂の情」は生硬な表現になっています。工夫したいところです。

2 ライン下り 伊藤賢治

伊藤さんの体質的なリズムが出ていて新しい展開の見える作品です。ところどころ、ごつごつした躓きそうなところがありますが、それが川の流れの変化で船の下っていくリズムが変化することを意識的に表現しているのかどうか。もしそうなら、もう少し意図的に表現をした方がいいと思います。最後から3行目の「人生を見た」はいらないのではないでしょうか。作品全体でそれを表現しようとしているのですから。

3 鹿沼のソラ 武田裕也

詩作品として評価することはできませんので、日記的な心情の吐露として読みました。詩を中断することも詩である場合があります。鹿沼のソラの下に、武田さんの居場所がつくれるといいですね。それぞれの「たたかい」に、無力ですが応援歌を歌いたいと思っています。祈る健闘！

**： 詩友会の皆さんには「かぬま詩草2006」の詩作品の寄稿をお願いしています。今年の自選の作品を2編以内寄稿してください。12月末が締め切りです。詳しくは、別紙要綱を見てください。発行責任者 小林